

古文書から知る潜伏キリシタンの実像

【その4 明らかにになった
潜伏キリシタンの風習(上)】

取り調べが始まると、崎津村の善吉や周平ら、潜伏キリシタンのリーダーたちは、自分たちの風習や信仰を次のように語りました。

一、「御天地にまします、御主でいうすさま、あんめんりゆす」と朝夕拝み唱えます。でうすを「漁神さま」と称し、大切にしています。

一、11月は、暦の上の中(上旬の中日?)を「祝日」として、魚肉(お刺身)や牛肉を供えます。その翌日から5日後が、「付入」と呼ぶ精進の日で、その翌日から49日目を「上り」と呼び、またお刺身でお祝します。

一、墓に参る時も、葬式の時も、手を組み「サントメ、サントメ、ミチのサントメ、あんめんりゆす」と唱えます。唱える回数に決まりはなく、逝去しても、(魂は)ずっと生き続けると考える信仰です。

一、どこへ(どの神社へ)参拝してもやはり「サントメ:略)あんめんりゆす」と唱えます。

崎津の潜伏キリシタンは、「デウス」を「豊漁の神様」として信仰していたようです。11月の「祝日」は、現在の暦でクリスマスにあたると思われる。キリスト教では行わない「お供え」を牛肉やお刺身を使って行い、デウスへの感謝を示したのでしょう。

また、神社への参拝時に「あんめんりゆす(アーメン)」と唱えているという記録が根拠となり、江戸時代を通じて崎津村で大切にされてきた崎津諏訪神社が、世界文化遺産「潜伏キリシタン関連遺産」の構成要素となったのです。

潜伏キリシタンは、長い継承の中で、キリスト教と神仏信仰などを混合し、生業に根差した独自の信仰形態に変化させていたことがわかります。



▲「あんめんりゆす」と祈りを唱えた崎津諏訪神社

天草 見どころ図鑑

西平椿公園内にあり、巨大な岩を抱くアコウの木。6m四方ほどの巨石「蔵石」に絡みつくしっかりとした根は生命力の強さを感じさせ、アニメ「天空の城ラピュタ」の世界観を彷彿させる神秘的なその姿は、まさに圧巻です。

★見どころポイント

西平椿公園から望む東シナ海へ沈む夕陽は、日本の夕陽百選に選ばれるほどの眺めです。



▶西平椿公園のアコウの木(天草町)

キラリ天草人

川原征一郎さん(中村町)



地域の人の心の架け橋に

「折り紙先生」
大きな声で呼びながら手を振る子どもたち。それに微笑みながら応えるのは児童館や老人会、養護老人ホームなどで折り紙を教えている川原征一郎さん。

大学で海洋学を学んだ川原さんは、天草海底自然水族館(平成22年に閉館)に勤めていた。長年飼育係や調教師として働き、イルカショーも川原さんが始めた。館長に就任してからは館内の案内役を買って出た。しかし、子どもたちに生き物のことを説明したいが聞いてくれず一生懸命考え、折り紙を思いついた。さっそく亀を作って説明したところ子どもたちは興味津々で聞いてくれた。そこから折り紙にはまり、折り紙教室を始めて約20年になる。

1年目は市販の本で勉強していたが、みんなに喜んでもらいたいという思いで、2千種類を超える。簡単なものから難しいものまで何でも教えてくれると評判で、駆け寄ってくる子どもたちの姿から人柄が伝わってくる。「折り紙は子どもから高齢者までつなぐ手段としてとても良い」と川原さんはうれしそうに話す。

実は3歳の時に長崎で被爆している川原さん。その体験から戦争や平和、命の大切さを伝えることが自身の使命

だと感じている。子どもたちには折り紙をしながら「自分のことばかり考えていては喧嘩(戦争)になる。相手を思いやる心を持って行動し、人を好きになってほしい」と教えている。
川原さんは、他にも地域の人のために民生委員や小学生の登下校の見守りなどさまざまな活動を行っている。これからも折り紙で出会った人たちの笑顔を元気の源に、人と人の架け橋になるよう活動を続けていく。



1 子どもたちと一緒に登校 2 子どもとふれあう川原さん 3 養護老人ホームでの折り紙教室

